

武田勝彦

日本文学問はず語り



東書選書



東書選書  
76

# 本文学問はず語り

武田勝彦

武田勝彦 (たけだかつひこ)

1929年、東京小石川生れ。上智大学大学院修士卒。慶応義塾大学講師、トロント大学、ハワイ大学客員教授を経て現在、早稲田大学教授。文芸評論家。著書——『川端文学と聖書』『荷風の青春』『立原正秋伝』『日本的なものの原点』『三島由紀夫事典』(編)ほか。

日本文学問はず語り

武田勝彦著

東書選書 76

昭和五十七年七月二十一日 第一刷発行

定価——九八〇円

発行者——小高民雄

発行所——東京書籍株式会社

東京都台東区台東一丁目十六番二〇

印刷・製本——図書印刷株式会社

©Katsuhiko Takeda 1982, Printed in Japan

0391-599076-5313 直丁・落丁の場合はお取替いたします

# 目次

プロローグ 7

第一章 文学の虚と実 『源氏物語』の虚真論 17

第二章 抒情と叙事 『古今和歌集』にみる抒情性 35

第三章 随筆文学の系譜 表現としてのエノセイ 55

第四章 断念の美学 『平家物語』と『正法眼蔵』 71

第五章 悲劇 v.s. 喜劇 能と狂言 89

第六章 不易流行の理論 芭蕉の俳論 105

第七章 町人文学と市民文学 江戸文学の面白さ 123

第八章 写実主義と写真主義 『明治期文学』の成立 139

第九章 〈私〉の表出 自然主義と私小説 157

第十章 歴史小説と内なる〈私〉 史実と想像 175

十一章 無意識下の性 古典から現代文学まで 191

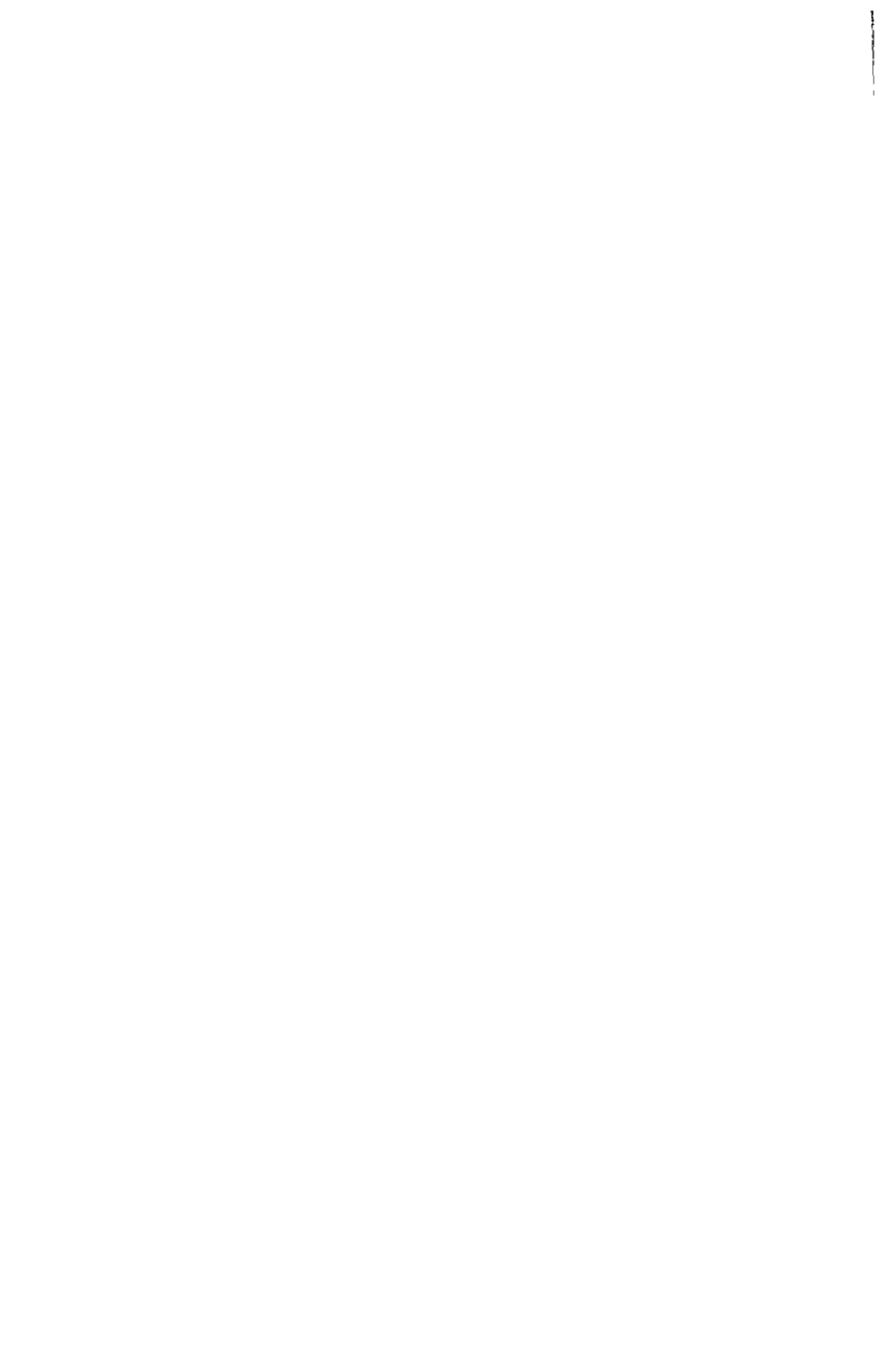
十二章 時間への挑戦 現代人の心を映す新しい手法 207

エピソード 225

装幀・勝井三雄

日本文学問はず語り





## プロローグ

日本人としてアメリカの大学で日本文学の講座を担当していると、日本では思いもつかなかつたことを尋ねられて、はたと当惑することがある。ゲインズヴィルのフロリダ大学に集中講義に出かけた折、川端文学の第一人者トーマス・スワン氏から、日本で出版されている『世界文学全集』には、なぜ日本文学を代表する名作が除外されているのかと問い詰められて、当惑したことがある。スワン氏は白水社の八十巻本の『新しい世界の文学』に川端作品が入っていないことに不満をぶちまけていた。『みづうみ』の時間の扱い方、『片腕』のヌーヴォー・ロマンの手法などを指摘して、日本の読書人は世界文学を西欧文学として受けとめているのかと慨嘆していた。

私は大正十四年の近代社の『世界短篇小説大系』や昭和二年の近代社の『世界戯曲全集』などから始まった『世界文学全集』ものの日本のあり方を説明し、最近の筑摩書房の『世界文学大

系』には、中国文学作品も収録されていることを指摘して防戦につとめた。しかし、スワン氏は新潮社の『世界文学小辞典』に『源氏物語』も『枕草子』も入っていないといつて、日本の知識人の〈世界〉という言葉に對する認識を追及して譲らなかつた。

スワン氏の素朴な質問もジャパノロジストとしての憤懣も、私には痛いほどよくわかる。明治以来、近代化の波に乗り遅れた日本人は、西欧コンプレックスにわざわいされて、日本固有の文学や芸術を視る眼を失つていた。高名な文芸評論家ですら、日本には一人のバルザックもいなかったといつて嘆いたほどだ。このような発想を転換させると、フランスには一人の家持も、一人の芭蕉もいなかったということになりかねない。ところが、日本人には、コンプレックスが高じたあまり、口にくそ出さないが、日本文学は西欧人、いや外国人には理解しえないと信じ込んでいるふしが見られる。

『源氏物語』を英訳で読んでも、筋がわかるぐらいで、ものあわれの美意識は鑑賞しえないと主張する類だ。川端康成がノーベル賞を受賞した折には、この劣等感がマスコミ界にも波及し、「果たして外国人に『雪国』はわかるのか」あるいは「ノーベル賞審査委員の中には日本語の原典を読める人がいたのか」などと書きたてる始末であつた。さらに、エドワード・G・サイデンステッカー氏の英訳のアラ探しを始める英語屋さんが登場したのは嘆かわしいかぎりであつた。

日本の多くの読書人は、ロシア文学にしても、北欧文学にしても、翻訳で読んで感激し、ときには涙を流さんばかりに共鳴しているのに、西欧人が翻訳で日本文学を読んだというとき、意地悪

げに果たしてわかるのだろうか、首をかしげるのはなぜだろう。よほど日本の翻訳者は優秀だと思つているにちがいない。日本の評論家や大学教授もアリストレスの理論を引用したり、スピノザの倫理学を援用しているが、すべての学者先生が原典を読んでゐるわけではない。それなのにどうして西欧人の日本文学の翻訳に対して疑いの眼を向けるのだろうか。私の独断と偏見かもしれないが、日本人は一般に外国語に弱いので、いくら一生懸命に西欧文学を読んでも、骨の髄まで理解しつくせないで、西欧人も日本文学の真髄はわかるはずはないと思ひ込んでゐるのだと考へたい。

あまりにも外的外れた『雪国』の英訳批判が公にされたとき、私の同僚であつたハワイ大学教授のジェイムズ・T・アラキ氏は、日本で訳されたアメリカ文学作品を検討しようといひ出したほどであつた。現在はブリテイッシュ・コロンビア大学教授に転任した鶴田欣也氏は、日本文学の読み方もあやふやだし、英語力にも問題のある日本人の英語教師が、見当外れの英訳批判をする、英訳者たちが嫌気がさして日本文学の英訳から手を引くのではないかと心配したほどだつた。

このようなエピソードを紹介したのは、日本人には日本文学にせよ、日本芸術にせよ、國際的視圈から眺める素地に欠けていると思われたからだ。〈世界文学全集〉に収録して遜色ない作品があつても、世界文学として日本文学の作品を評価することに抵抗を感じるわけだ。この文芸ナショナルリズムの垣根をとりはらうことが、本書執筆の私の動機の一つになつてゐる。俳句には季節があるとか、和歌には縁語があるから、西欧人には日本文学がわからないと信じ込んでゐるの

だ。こういった手合いの論理を錦の御旗として日本文学を考えていると、イギリス人からシェイクスピアの地口 (pun) は日本語に訳出しようのか、あるいはソネットは正確に日本語に移植することが可能なかと反論されることであろう。

言語を素材とした芸術の一ジャンルである文学は、音楽、絵画、彫刻、建築とは異なっていて、その精髓を理解することはまことにむずかしい。しかし、私はかなりの度合いまで内容を把握し、ネイティヴ・スピーカーと同じように理解し、鑑賞することが可能だと信じている。もちろん、ときにはやぶにらみになったり、とんでもない思い違いをすることはあるが、研究を積み重ねることによって、越えがたい山を越えられるのではないかと思っている。

幸か不幸か、私は来る年も来る年も、アメリカ人の学生に英訳本をテキストとして日本文学を教え、日本人の学生に日本語で十九世紀英文学史とか現代アメリカ文学の講義をしている。どちらの教室でもまさに隔靴搔痒の思いに悩まされる。こんなことがと思う些細なことに学生が足をとられるからだ。アメリカの大学でも大学院レベルとなると、テキストは原典で講義は英語だ。川端康成の『山の音』を「やまのね」と読んだ学生がいたとしても、笑うことははばからねばなるまい。主人公の尾形信吾の信吾を「のぶご」と読んだからといって、この学生の作品理解度を最初から過小評価してはならないのだ。夏目漱石の『琴のそら音』を学んだ学生は、つい「音」を「ね」と読んでしまう。織田信長の読み方に馴れた学生は信吾を「のぶご」と発音してしまふ。こうした体験は、何年も現場で教えていないと、なるほどとうなずけないのだ。

川端康成の代表作の一つに『千羽鶴』と題する小説がある。日本人なら折紙の鶴のことだと一読してわかるが、西欧人相手となると、ことは面倒だ。フランス語訳は *Nuée d'oiseaux blancs* となっている。これは直訳すると「白い鳥の大群」となる。東アジア圏では長寿、幸福のシンボルともなっている鶴が消されて、白い鳥になっっているのはなぜだろうか。鶴はフランスばかりでなく、隣国のドイツやイギリスでも、日本人が歓迎するほど人気のある鳥ではない。それが証拠には、これらの国々の小説や詩や戯曲を読んでも、鶴に出会うことは少ない。聖書でも旧約のほうには鶴は二回登場するだけだ。

わたしは、つばめのように、つるのように鳴き、はとのようにうめき、わが目は上を見て衰える。(『イザヤ書』38・14)

空のこうのとりのとりでもその時を知り、山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。しかしわが民は主のおきてを知らない。(『エレミヤ書』8・7)

鶴が単独で聖書に出てくることはないくらいだから、この鳥に寄せる関心が薄いわけだ。しかも、鶴にはどうやら性を呼び起こすイメーシすら与えられているらしい。これは私が文献で調べたこととなく、話に聞いたことなので今後さらに検討しなくてはならない。

西欧文化圏の夢のシンボル事典として知られているハンス・クルトの *Lexikon der Traumsym-*

bole)にも、鶴の見出し語はない。ところがこうのとりは、豊饒の象徴、願望および憧憬の夢として解釈されている。フランス語訳の表題の「白い鳥の大群」はその意味では、原題に近いわけだ。英訳表題の *Thousand Cranes* やドイツ語訳表題の *Tausend Kraniche* は、語義の直訳としては原題の表面の意味に近いが、読者の想像力を喚起する力は弱い。それどころか、読者にまったく違ったイメージを与えることすらあるのだ。

ナンシュビルのヴァンダービルト大学の私のクラスにナイジェリアの留学生がいたことがある。この学生は学期の初めにペーパー版のテキストを買い、その表紙にほんものの鶴が田の上を舞っている絵を見て、てっきり鳥の出でくる物語と想像してしまったのだ。南の国から北の国に来て、日本文学を履修した留学生は、『千羽鶴』に限らず、円地文子の『女坂』につまづいたり、遠藤周作の『黄金の国』にひっかかっていた。しかし、立原正秋の『剣ヶ崎』に入ると、人種差別の側面にだけ目をらんらんと輝かせ、自分の国の文学作品と対比させて活発に討議をリードした。しかし、死と美との微妙な交構は理解しえなかったようだ。

文学を国際的視座でとらえることが、いかにむずかしいことかは、ほぼおわかりいただけだ。と思う。しかし、日本文学なりイギリス文学なりロシア文学が、母国語国民にしか真に理解しえないという十九世紀の決定論に屈服してはならないのだ。

私が本書を世に問いたいと願うもう一つの原因は、マルクス主義やコントの実証主義の超克である。ドイツ文学を学んでいた私は、第二次大戦後、経済学を専攻し、大きな『資本論』に立ち

向かい、その後、ケインズの『雇傭・利子および貨幣の一般理論』を学んで、マルクス主義から脱却した。その後、英米文学に血道をあげたが、アメリカでジャパノロジストたちと出会い、日本文学を再発見した。永井荷風とは目と鼻の所に生まれ育ったこともあって、旧制中学時代から荷風文学に耽溺し、美の系譜を追って潤一郎、康成を読み漁っていた自分へと回帰したのであった。

したがって、現実と言語の意味する内容とを直接に関連させようとする決定主義に基づく実在論とは訣別していたのである。文学作品へのこのようなアプローチの仕方は、一九二〇年代のいわゆる新批評の態度であった。革命直後のソ連とチェコでフォルマリストと呼ばれる一群の学者たちの試みた方法論や、J・C・ランサム、アレン・テート、ロバート・ペン・ウォレン、あるいはクリアンス・ブルックスらの新批評の旗手たちに親近感をもったのである。

私は言語世界の自律性という信念をもち、現実と言語の一对一の対応を否定する基盤に立って文学を視るようになった。しかも数年前からランサム、テート、ペン・ウォレンらが学んだり教えたりしたヴァンダービルト大学客員教授に就任し、ますます批評の姿勢を確立させるようになった。新批評のタンブールを打ち鳴らした学者たちが、宗教改革にも産業革命にも啓蒙主義にも背を向け、中世を直視し、いかに中世に憧憬しているかを追体験した。彼らがヨーロッパ近代の主流に反旗をひるがえすのを視たとき、明治以降の日本の啓蒙主義者の不甲斐ない批評精神に挑戦しなくてはならないと思った。文学作品を文学作品として理解し、分析し、鑑賞し、評価しな



くはならないことに気づいた。作品を作者の伝記的事実から切り離し、さらに歴史的社会的背景をも切り落として、作品に内在する意味を探求することで文学を理解しようとした。そのために自ら負わねばならぬ欠陥があることも認めている。しかし、言語を素材とした芸術を言語そのものに基礎を置いて研究しなくてはならないことは、広く国際的に承認されている。私はただ一途に反啓蒙主義者になろうとしているのではない。日本文学には理論がないというような類のプロバカンダを掲げることに反対しているのだ。明治・大正さらに昭和前期の知識人は西欧の理論、それもあ

る意味で反現代の啓蒙主義を鵜呑みにしたにすぎない。したがって、文学に引きつけていえば、十九世紀の文学理論で日本文学を裁断したわけである。そのために『世界文学全集』に日本文学の作品を収録することすら否定する監修者が誕生したのである。

また一方、日本文学は日本語固有の国文学という名称で呼ばれ、今もなお続いている。すでに歴史の分野では、国史の名称は廃され、日本史といわれているのに、文学の世界ではまたに国文学が勢力を得ている。外国人には国文学はわからないという無意識の主張も、この名称の存続と無縁ではあるまい。

近代文学の一つの重要な系譜に私小説といわれるジャンルがある。この形式の小説それ自体には問題はないが、批評家のほうがむやみやたらに『私』にこだわって、作品そのものの価値より、『私』の表出の仕方に批評の重点を置きすぎているのは考えものだ。小説に表出した公の『私』